1950年代のピューリタニズムの封じ込め方
——ジョン・チーヴァー「さよなら，弟」論

杉　野　健太郎

1970年代にさかんに紹介されたものの今や日本では読まれることが少なくなったジョン・チーヴァー（John Cheever: 1912—82)。第二次世界大戦後の20世紀アメリカ小説をリアリズム小説と非リアリズム小説（あるいは実験的小説）に分けるとすれば，チーヴァーがリアリズムの作家に属することに異論をとなえる者はなかろう（例えば，Hilfer 165—66, Waldeland 28を参照のこと)。では，リアリズムの作家であるとすれば，チーヴァーの小説は，何を記録・再現している（ようにみえる）のであろうか。これには，本国アメリカにおいても日本においても同様の定説がある。ジョン・アップダイク（John Updike: 1932—）に先立って，郊外に住む白人のアッパー・ミドルの人々をはじめて本格的に描いたと。[1]

この定説に特に異論はない。自身1951年にニューヨークから郊外に引っ越したチーヴァーの小説が郊外を舞台にすることが多いのは事実だからである。しかし，もちろん，レッテルは多くのものを捨象してしまう。チーヴァーに与えられたこの「郊外作家」というレッテルも同様である。ウォルデランド（Waldeland 27）も指摘する通り[2]，チーヴァーは単に郊外の記録者ではない。最初の小説集『人の生きかた（*The Way Some People Live*)』(1943) のほとんどすべての小説は主に都市を舞台にしている。また第二小説集『途方もないラジオとその他の小説（*The Enormous Radio and Other Stories*)』には，都市が引き続いて主要な舞台になるが，郊外その他が舞台設定の小説も含まれている。本論文では，『途方もないラジオとその他の小説』に収められ，郊外でも都市でもない海辺の別荘を舞台にした小説でもあり，またチョーヴァー自身の郊外への引越し後の初作品である（Donaldson, *John Cheever* 139)「さよなら，弟（Goodbye, My Brother)」(1951) を取り上げ，「郊外作家」といったレッテルが捨象してしまうものの一例を示すとともに，チーヴァー文学の可能性を示したいと思う。

兄弟

空白を挿んだ6つの部分から成る「さよなら，弟」は，四人兄弟（ただし，一人は女性）の一番下の弟ローレンス・ポメロイがマサチューセッツ州のある島にあるポメロイ家所有の海辺の別荘にやって来て，すでに成人し独立した兄弟及びその家族と過ごしそして去るまでに起こる出来事を省略を挿みながら年代記的順序（chronological order)[3] で伝えている。

ポメロイ家の親近さを伝える冒頭の文（"We Are a family that has always been very close in spirit"[3]）を読みすすめ，最初の部分の終りに近づくと，様相は一変する。ローレンスがポメロイ家のなかで異化効果をもたらすほどに異質であることが明らかになるからである。

Lawrence is the member of the family with whom the rest of us have least in common. (4)
Their [Lawrence and his wife's] presence in the house seemed to refresh our responses to the familiar view. (5)

いや単に異質なだけではなく，ローレンス以外のポメロイ家構成員は，昔からローレンスを嫌っている。

We had disliked him. (4)
Our dislikes are as deeply ingrained as our better passions [...]. (5)
Everyone [of the Pommeroys] talked wrathfully about Lawrence; about how he endeavored to spoil every pleasure. (12)

ピューリタニズム

では，ローレンスとローレンス以外のポメロイ家構成員との間には，どのような差異があり，なぜローレンスは嫌われるのか。それは，「あらゆる快楽を台無しにしようとする」("he endeavored to spoil every pleasure"[10]) ローレンスの禁欲主義とローレンス以外の快楽主義の対立と言えるであろう。

Lawrence is the only member of the family who has never enjoyed drinking. (5)
Lawrence doesn't gamble, so he can't understand the excitement of winning and losing money. He has forgotten how to play the game, I think, so that its complex odds can't interest him. His observations were bound to include the fact that backgammon is an idle game and a game of chance, and that the board, marked with points, was a symbol of our worthlessness. (12)

ローレンスは，この引用にあるような飲酒，ギャンブル，「怠惰なゲーム，偶然が支配するゲーム」だけでなく，不正直，ぜいたくな食事(5)，享楽的な仮装ダンスパーティ（14—17）を忌み嫌う。それだけではなく，ポーランド系のコックに嫌な思いをさせる「陰鬱な（gloomy)」(19)ローレンスは，離婚しフランスに住んでいる姉ダイアナの異性関係を批判し(6)，そのダイアナ，及び胸の谷間をあらわにし「あらゆる男と不真面目に戯れようとし」(12)ローレンスの目から見たら「私」を誘惑しようとする(13)オデット（兄チャディの妻）を「淫乱女（promiscuous woman)」(19)と呼び[4]，乱れた性関係（あるいは，書かれた時代を考慮すれば，解放されつつある性意識）を否定する。

ローレンスはただの禁欲主義者ではない。ローレンスは，「ピューリタンの聖職者」のような人物として表象されている。

Lawrence and Ruth were sitting at the edge of the terrace, not in the chairs, not in the circle of chairs. With his mouth set, my brother looked to me then like a Puritan

cleric. (6)

ミーナー（Meanor 45）も指摘するように，「軽薄（frivolous)」「アル中」だと彼がみなした(19)母，大学時代の酒飲みのルームメイト，イェール大学に対してなど，彼が人生で行った「さよなら」のうちの一つは，「プロテスタントの監督教会（Protestant Episcopal Church)」（アメリカにおけるイギリス国教会)，要するにイギリスでピューリタンが純化しようとした敵に対してであった（18—19)。また，ローレンスは，ポメロイ家のなかで「小さなキリスト（Little Jesus)」「悲観論者（Croaker)」と昔は呼ばれ，今は「人間嫌い」(16)と見なされている。妻のルースは，「贖罪のイメージ（penitential image)」を与える(17)。いずれにせよ，みだらな性，飲酒，ぜいたく，享楽，怠惰，偶然が支配するゲーム（もちろん，偶然性はピューリタニズムの予定説・決定論に反するものである)，イギリス国教会を忌み嫌うローレンスをピューリタン的と見なすことに異議はないだろう。

このピューリタン的な末弟ローレンス及びその家族と対立するその他のポメロイ家の人々及びその家族。ミーナー（Meanor 45）も指摘するように，この対立を鑑みれば，母が住む街でありアメリカ独立宣言の地として知られるフィラデルフィァが語源的に兄弟愛の街（city of brotherly love）という意味を持つことは皮肉であろう。また，オハラによれば，ポメロイ家のサマーハウスがあるマサチューセッツ州の島の海岸にある別荘地「ローズ岬（Laud's Head)」(3)は，意志に関して相対立する考えを持つピューリタンとイギリス国教会の自由思想家が対決した場所である（O'Hara 29—30)。[5] 両者の間の対立は，現実観・価値観をめぐる争い，どちらの「現実」が支配権を勝ち得るかの争いでもある。

> "Come out of this gloominess. Come out of it. It's only a summer day. You're spoiling your own good time and you're spoiling everyone else's. We need a vacation, Tifty. I need one. I need to rest. We all do. And you've made everything tense and unpleasant. I only have two weeks in the year. Two weeks. I need to have a good time and so do all the others. We need to rest. You think that your pessimism is an advantage, but it's nothing but an unwillingness to grasp realities."
>
> "What are the realities?" he [Lawrence] said. "Diana is a foolish and a promiscuous woman. So is Odette. Mother is an alcoholic. If she doesn't discipline herself, she'll be in a hospital in a year or two. Chaddy is dishonest. He always has been. The house is going to fall into the sea." He looked at me and added as an afterthougtht, "You'r a fool."
>
> "You're a gloomy son of a bitch," I said. "You're gloomy son of a bitch." (19)

アベルとカイン，そしてヘレニズム

ローレンスとそれ以外の兄弟三人との対立は根深い(5)。ローレンス以外の兄弟三人は，単に対立しているだけではなく，ローレンスを改心あるいは宗旨変えさせたい（"reclaiming a brother"）と思っている。これに対して，ローレンスの方は，さよならを言いにサマーハウスに来たのだという。

> We had disliked Lawrence, but we looked forward to his return with a mixture of apprehension and loyalty, and with some of the joy and delight of reclaiming a brother. (4)
>
> "I don't like it here," he said blandly, without raising his eyes. "I'm going to sell my equity in the house to Chaddy. I didn't expect to have a good time. The only reason I came back was to say goodbye." (18)

言わば，禁欲主義者と快楽主義者，ピューリタンと反ピューリタンといった対立。ローレンスと対立する三兄弟のなかで最もローレンスを嫌っているのは，25年前にもローレンスの頭を石で殴ったことがある(5)語り手「私」であろう。この「私」が海辺でローレンスを木の根を用いて背後から25年ぶりに殴打することによって，ローレンスと「私」の仲は決定的な決裂に至る。ウォルデランド（Waldeland 29）の顰にならって，この二人，「私」とローレンスをカインとアベル（旧約聖書『創世記』第4章）と呼んでも良いだろう。あるいは，チーヴァーがユダヤ・キリスト教神話的枠組みを用いているとも言えるだろう。

「私」がローレンスを木の根で殴打した後，この物語は，死にはしなかったローレンスが島を去ることを主な出来事とする最後の六つめの部分の以下のエンディング・パラグラフで終る。

> Oh, what can you do with a man like that [Lawrence]? What can you do? How can you dissuade his eye in a crowd from seeking out the cheek with acne, the infirm hand ; how can you teach him to respond to the inestimable greatness of the race, the harsh surface beauty of life ; how can you put his finger for him on the obdurate truths before which fear and horror are powerless? The sea that morning was iridescent and dark. My wife and my sister were swimming—Diana and Helen—and I saw their uncovered heads, black and gold in the dark water. I saw them come out and I saw that they were naked, unshy, beautiful, and full of grace, and I watched the naked women walk out of the sea. (21)

ダイアナとヘレンが歩いて海から裸で上がってくるこのエンディングは，コール（Coale 63）によればヴィーナスの誕生を暗示するものであり，ヘレニズム的なもの（あるいはオハラ［O'Hara 34］の言葉を借りれば，異教的なもの）を優勢にし，ピューリタン的なローレンスの敗北を暗示していると言えるだろう。この物語は，禁欲主義ではなく快楽主義が，ピューリタニズムではなく反ピューリタニズムが，ヘブライズムではなくヘレニズムが勝利する物語，ミーナー（Meanor 43）の言葉を借りれば，「生を否定するピューリタン的な悲観論者（life-denying Puritanical nay-sayers)」ではなくて「生を肯定する楽観論者（life-affirming yea-sayers)」が勝利する物語だとひとまず言えるだろう。

葬り切れないピューリタニズム

ピューリタニズムが敗北する物語とすぐ上でひとまず書いた。次に，その敗北の意味合いを

吟味してみよう。

ピューリタン的なローレンスがポメロイ家から排除されただけなら単純な話だろう。しかし，話はそう簡単ではない。いくつかの点を確認していこう。実は，ポメロイ家は，ピューリタンの末裔である。

> Lawrence and Ruth were sitting at the edge of the terrace, not in the chairs, not in the circle of chairs. With his mouth set, my brother looked to me then like a Puritan cleric. Sometimes, when I try to understand his frame of mind, I think of the beginnings of our family in this country, and his disapproval of Diana and her lover reminded me of this. The branch of the Pommeroys to which we belong was founded by a minister who was eulogized by Cotton Mather for his untiring abjuration of the Devil. The Pommeroys were ministers until the middle of the nineteenth century, and the harshness of their thought—man is full of misery, and all earthly beauty is lustful and corrupt—has been preserved in books and sermons. The temper of our family changed somewhat and became more lighthearted, but when I was of school age, I can remember a cousinage of old men and women who seemed to hark back to the dark days of the ministry and to be animated by perpetual guilt and the deification of the scourge. If you are raised in this atmosphere—and in a sense we were—I think it is a trial of the spirit to reject its habits of guilt, self—denial, taciturnity, and penitence, and it seemed to me to have been a trial of the spirit in which Lawrence had succumbed. (6)

ローレンスのイデオロギーは，言わばポメロイ家の本流あるいは源流のイデオロギーであり，他の三兄弟はポメロイ家のイデオロギー的変節者と言えるだろう。マルチカルチュラリズムの時代とはいえ，ピューリタニズムが「アメリカ合衆（州）国の多くの特徴の形成に大きな影響を与え続けてきた」（Patterson 180）ことは否定できない。言わば，ローレンスの排除は，WASP[6] ポメロイ家自身が拠って立つイデオロギー的根拠であるピューリタニズムを排除したことになるのである。

しかし，その「宗旨変え」(4)に応じないローレンスの排除は，テクストを仔細に読むと，ためらいに満ちたものであったことが分かる。この兄弟間の諍いは，カインとアベルのそれに喩えられることが多い（Waldeland 29だけでなく，O'Hara 29，Meanor 43などを参照のこと)。しかし，その最大の違いは，カインのアベル殺しが成就したのに対して，「私」のローレンス殺しは成就せず未遂に終ったことである。この殺人未遂に関するテクストを復習してみよう。「私」は海辺でローレンスを木の根を用いて背後から25年ぶりに殴打し，ローレンスは血を流しながらひざまずく。「私」は，ローレンスの死を願うが，礼だけはつくして彼を葬りたい（“putting him away”）と願う。

> Then I wished that he was dead, dead and about to be buried, not buried but about to be buried, because I did not want to be denied ceremony and decorum in putting

him away, in putting him out of my consciousness [...]. (19)

しかし，「私」はローレンスにとどめをさしたいと願いながらも，「殺人者とサマリア人（murderer and Samaritan)」（もちろん，［良き］サマリア人は新約聖書のルカからである）という二重の挙措をとり，治療を施してしまう。

I would still have liked to end him, but now I had begun to act like two men, the murderer and Samaritan. [...] I took off my shirt and tore it to bind up his head. (20)

WASP ポメロイ家のイデオロギー的嫡子であるピューリタン的なローレンスを葬り去ることの困難さ。この困難さは，この物語の語りにも表れている。「私」を語り手とする一人称の語りではローレンスを嫌う「私」の視点ばかりが圧倒的優位に立つので，「私」のローレンス嫌い及び排除がどこまで正当性を持つのかが読者には今一歩判然としないからである。この物語では，語り手「私」がローレンスの心情を推測することが多い（8，10，12，13，16，17—18，21）が，読者がローレンスの直接的心情を判断できるのは直接話法で伝えられる彼の話し言葉を通してのみである。上で引用したエンディング・パラグラフも，語り手は読者に直接語りかけているので，客観的呈示とは言い難い。[7] ローレンスといっしょにいると「自意識的（self-conscious)」になる(13)と書く語り手「私」にふさわしい語りの人称選択になっているとも言えるだろう。ピューリタン的なローレンスが文字通りの意味で葬られることこそないが排除され封じ込まれるこの物語の語りは，一方的に「私」の見地を伝え，読者のローレンスへの肩入れを最初から封じ込める構造になっていると言えるだろう。したがって，この物語の内容，換言すれば，「私」およびその他の兄弟によるローレンス排除も，公平性・公正性・正当性・客観性に欠ける。いやそもそも，どちらかにイデオロギー的な正当性があるわけではない。上述の「私」とローレンスの現実観の覇権争いと同じく決着がつかないので，封じ込める以外には手はない。したがって，このような語りになっているとも言えるだろう。

いずれにせよ，この物語において，「生を否定するピューリタン的な悲観論者」ではなくて「生を肯定する楽観論者」が優位に立つことは否定できない。ただ，同時に，「私」が一族のイデオロギー的本流であるピューリタン的な弟を葬り切れず封じ込めるだけの物語であることも否定できない。

1950年代のピューリタニズム

作者チーヴァー自身は，この小説の生成に関して書いた文章において，作家としての自分の使命を以下のように述べている。

I came from a Puritanical family and I had been taught as a child that a moral lies beneath all human conduct and that the moral is always detrimental to man. I count among my relations people who feel that there is some inexpugnable nastiness at the heart of life and that love, friendship, Bourbon whisky, lights of all kinds are merely

the crudest deception. My aim as a writer has been to record a moderation of these attitudes—an escape from them if this seemed necessary—and in the backgammon story I had plainly failed. It was in essence precisely the kind of idle pessimism that I had hoped to enlighten. It was in the vein of one of my elderly uncles who never put a worm on a fish hook without stating that sooner or later we will all be corruption. (Cheever "What Happened" 571)

作者チーヴァーの述べることをそのまま受け入れることはもちろん危険だが，作家としての自らの使命はピューリタン的な態度を和らげることだ（"My aim as a writer has been to record a moderation of these attitudes"）というチーヴァーの言葉は，この「さよなら，弟」にまさに当てはまると考えてよいだろう。「和らげること（moderation)」という言葉も，上述したようにピューリタンを葬り切れず，また真正面から否定できないこの小説に当てはまるだろう。

語り手「私」は，ローレンスが仮装ダンスパーティでの花嫁とフットボールの衣装を批判していると推測する(16)。オハラも，ローレンス以外の人々がこだわる古い羽目板（8—9）やフットボールのコスチューム（14—17）が国民として成熟することに失敗したアメリカ全体の失敗だというチーヴァー自身の経験に基づく記述（Cheever "What Happened" 571)[8] を引用しながら，この物語において，ローレンスのピューリタニズム的姿勢だけではなく，その他の人々も批判されているのではと示唆している（O'Hara 32)。確かに，ローレンスの道徳的姿勢に支持を示す読者も少なくはなかろう。オハラは続ける。この「道徳的あいまいさ（moral ambiguity)」は，ローレンスおよび「私」の双方がチーヴァー自身の「二面（two sides)」「分身（halves)」だからであると。

Taking Cheever's "factual" statements literally is a risky thing at best, but in this case he seems to be admitting that both Lawrence and his brother had their genesis in a single narrative view point—John Cheever's. Two sides or "halves" of Cheever himself, in short, find expression in "Goodbye, My Brother" : the negative hypercritic and the cheerful optimist. Understanding this might not make the story's ethical ambiguity any less complicated, but it may clarify our sense of both the narrative and its creator to realize that in having his narrator wreak mayhem on Lawrence, Cheever is possibly trying to exorcise one of his own demons.

The theme of life's essential goodness—the notion that although we must continually struggle against evil wrought by others and ourselves, there is reason to hope in a divine benevolence—would frequently reappear in Cheever's fiction over the next twenty-five years, but with diminishing resonance.(O'Hara 32—33)

言わば，自らの一族のイデオロギー的末裔であるローレンスに対して「私」が行った「殺人者とサマリア人」という二重の挙措は，チーヴァー自身の挙措なのである。

オハラのこの引用によればチーヴァーの作品に「生の本質的善性というテーマ」がその後

25年間の間弱くなりながらも頻出するそうだが，この「さよなら，弟」が発表されてからその25年以上経った後に二人の研究者は以下のように書いている。

> After a nasty argument, the narrator, in frustration, strikes Lawrence from behind with a heavy root he finds on the beach, in what almost seems to be a biblical reversal in which an Abel-figure strikes Cain. (Waldeland 29)

> "Goodbye, My Brother" becomes the first of many of Cheever's early New York stories that deal with the necessity of exorcising an Edenic place, situation, even mental states, of a corrupting influence. (Meanor 46)

ウォルデランドによれば，アベルのような人物である兄「私」がカインのような人物である弟ローレンス（ちなみに，聖書ではカインが兄でアベルは弟である）を殴打するので，聖書とは逆である。しかし，そのようなことが言える根拠はまったくないだろう。聖書では献げ物を主（しゅ）に受け入れてもらえない兄カインが献げ物を主に受け入れてもらえる弟アベルを殺すわけだが，ピューリタン的であるローレンスがアベルであると見なすことも同様に可能だろう。ウォルデランドは，ピューリタンは悪であり，他のあらゆるものより劣位にあるという前提に立ってしまっていると言えるだろう。また，ミーナーは，ローレンスを，エデンを腐敗させる者とみなしている。だが，キリスト教的に考えて，ローレンス以外の者たちがエデンに住む者で，ピューリタン的であるローレンスが腐敗をもたらす者とは決めがたいだろう。両者とも，ピューリタン＝悪という正当性が怪しい考えを前提としてしまっている。確かにこのテクストには反ピューリタン的色彩が優勢であると言えるだろうが，両者は，テクストにある揺らぎを見逃すだけではなく，ピューリタン＝悪という前提に立ってテクストを論じてしまっている。換言すれば，テクスト，チーヴァー自身，そして時代とも共振していたであろうピューリタニズムに対する姿勢の揺らぎは，この両者の批評からは消え失せているのである。

この小説が書かれた1950年代のアメリカは，消費社会が成立した時代（間々田の特に序章を参照のこと），「ゆたかな社会（affluent society）」（ガルブレイス）と呼称される時代である。ソ連や共産主義だけではなくピューリタニズムも封じ込められたかどうかは定かではないが，またこの時代は，アメリカが封じ込め政策（containment policy）という外交政策を採った冷戦時代のはじまりであった。ネイデル（Nadel 2－5）によれば，この封じ込め政策は外交だけではなく生活をも支配し，共産主義の封じ込めは，原子に関する機密，性的放縦，性的役割，核エネルギー，芸術の封じ込めへと至った。相反する正反対の二つの力が存在する時代。この1950年代のアメリカの定番的歴史書は，ジャーナリスト，D・ハルバースタムが書いた『ザ・フィフティーズ』である。彼によれば，1950年代は，「1960年代の激動の時代に爆発した力のほとんどの芽がすでに育ちはじめていた」（Halberstam 799）時代である。換言すれば，相克する力がせめぎあっていた時代と言えるだろう。「さよなら，弟」（1951）が発表された年代と上記の批評が発表された1979年（ウォルデランド）・1995年（ミーナー）との間の時間の推移が，これらの批評に刻印されているとも言えるだろう。要する

に，この小説に刻印され，そしてチーヴァー自身にも時代にもあったであろう，ピューリタニズムと反ピューリタニズムとの相克が両者の批評からは消え失せてしまっているのである。これは，1960年代という対抗文化の時代を経て，アメリカのイデオロギー・ヒエラルキー上のピューリタニズムの地位が大幅に下落したためであろう。いずれにせよ，このテクストのピューリタニズムに対する揺らぎがチーヴァー自身そして時代と共振しているだろうことは想像に難くない。上の引用でオハラは，この小説に見られる「生の本質的善性というテーマ」，換言すれば，ピューリタニズム否定が，その後25年かけて薄らいで行くと書いた。この25年かけての薄らぎは，チーヴァー自身の変化だけでなく，時代の変化をも刻印していることは間違いないだろう。いずれにせよ，「郊外作家」といったレッテルを貼られるチーヴァーの作品に，単に郊外が記録されているだけではなく，20世紀後半のアメリカのより大きな変化，とりわけピューリタン道徳[9]にまつわる変化の揺らぎはじめが刻まれていることを本論が垣間見せることができたとしたら幸いである。

注

1．例えば，*The Oxford Companion to American Literature* の第二版（1995）には“His many stories [...] frequently dealing satirically with affluent New Englanders living in suburbia, have been colletced in *The New Yorker*”, *Reader's Encyclopedia of American Literature* の第二版（2002）には“He wrote stories about middle-class people living in reduced circumstances in the city. In 1950 he joined the millions of Americans who had moved from the city to suburbia after World War II and made suburban life the focus and setting of his fiction.”，という記述がある。また日本の『集英社世界文学事典』（2002年）には，「彼が好んで書いたのは，アメリカの郊外都市（サバービア），上位中産階級（アッパーミドル）と呼ばれる階層に属する人たちである。彼らのもろさを見抜き，哀歓や挫折を共感をこめて書き，郊外を現代アメリカを映す小宇宙にしたところから<郊外のチェーホフ>と呼ばれた。」と記述されている。また，大場，川本，浜野，若島を参照のこと。郊外文学に関する新しい研究としては，Jurca を参照のこと。

2．Waldeland（27)は，以下のように書いている。“The stories in *The Way Some People Live* almost all employed urban settings, and most involved characters whose lives ran on city rhythms. In fact, those critics who simplistically refer to Cheever as a chronicler of the suburbs are overlooking the degree to which the city, especially New York, dominates his first collection and continues to be important in number of stories in his second volume. In *The Enormous Radio*, however, Cheever also uses as settings a seaside cottage (“Goodbye, My Brother”), a suburb (“The Cure”), a ski resort (“The Hartleys”), and a farm (“The Summer Farmer”).

3．チーヴァーの最初の長編小説のタイトルが『ワップショット家年代記（*The Wapshot Chronicle*)』（1957）であることは当然思い出されてよい。

4．ミーナー（Meanor 46）によれば，ヘレン，ダイアナ，オデットという官能的な女性は陰鬱なローレンスとその家族に対置されており，オデットはプルースト，ヘレンとダイアナは神話への言及である。

5．オハラは正確には以下のように書いている。

The story is set at “Laud's Head...on the shore of one of the Massachusetts islands” (3), more specifically at a beachfront house owned by the Pommmeroy family, it central focus. Its true

location, however, is that border area of the New England spirit that Nathaniel Hawthorne so expertly delineated in stories like "The Maypole of Marymount" a century before. Cheever attempted his own exploration: the mysterious terrain where Puritan moralist confronts Anglican free thinker in a conflict of opposed wills.(O'Hara 29—30)
また，ミーナーによれば，ロード岬のロードは，ピューリタンが禁じたイギリス国教会式の音楽・典礼などに戻そうとしたかどで1645年に斬首されたイギリス国教会の大主教ウィリアム・ロードへの言及である（Meanor 43)。

6．ウィーラーの指摘（Wheeler 13）をまつまでもないが，チーヴァーの小説世界は，白人の特権に囲まれた世界である。ただ，詳述はさけるが，作者チーヴァー自身が支配的なWASP層だったかどうかは大いに疑問である。

7．ウォルデランドによれば，このエンディングは，チーヴァーがよく使うモノログである（"The story ends with a monologue by the narrator, a favorite fictional device which we will see often in Cheever's work." [Waldeland 29])。

8．フットボールの衣装を含む仮装ダンスパーティに関して，チーヴァーは，ハーシーとの対談（Cheever, John and John Hersey 158）において同様なことを述べている。

9．後年明らかになるが，チーヴァー自身はバイセクシュアルの志向を持っていた。この小説もバイセクシュアリティの封じ込めと読めるかもしれないが，今後の課題としたい。また，20世紀後半のアメリカにおける（特にセクシュアリティにまつわる）ピューリタニズムの変容を考察するために重要なもう一人の作家は言うまでもなくアップダイクであろう。

参照文献

Cheever, John. "Goodbye, My Brother." 1951. *The Short Stories of John Cheever*. New York : Vintage International, 2000.

—. "What Happened." *Understanding Fiction*. Ed. Cleanth Brooks and Robert Penn Warren. 2nd ed. New York : Appleton-Century-Crofts, 1959.

Cheever, John and John Hersey. "John Hersey Talks with John Cheever." 1977. *Conversations with John Cheever*. Ed. Donaldson, Scott. Jackson and London : University Press of Mississippi, 1987.

Coale, Samuel. *John Cheever*. New York : Frederick Ungar Publishing Company, 1977.

Donaldson, Scott, ed. *Conversations with John Cheever*. Jackson and London : University Press of Mississippi, 1987.

—. *John Cheever : A Biography*. Lincoln : iUniverse, 1988.

Freedman, Morris. "New England and Hollywood." 1953. *Critical Essays on John Cheever*. Ed. R. G. Collins. Boston : G. K. Hall & Co., 1982.

Halberstam, David. *The Fities*. New York : Fawcett Columbine, 1993.（ハルバースタム，デイヴィッド『ザ・フィフティーズ—1950年代アメリカの光と影』金子宣子訳，新潮社。）

Hilfer, Tony. *American Fiction Since 1940*. London and New York : Longman, 1992.

Hunt, George W. Hunt. *John Cheever : The Hobgoblin Company of Love*. Grand Rapids : William B. Eerdmans Publishing Company, 1983.

Jurca, Catherine. *White Diaspora : The Suburb and the Twentieth-Century American Novel*.

Princeton: Princeton University Press, 2001.
Matterson, Stephen. *The Essential Glossary : American Literature*. London: Arnold, 2003.
Meanor, Patrick. John *Cheever Rivisited*. Boston: Twayne Publishers, 1995.
Nadel, Alan. *Containment Culture : American Narrative, Postmodernism, and the Atomic Age*. Durham: Duke University Press, 1995.
O'Hara, Jemes E. John *Cheever : A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1989.
Waldeland, Lynne. *John Cheever*. New York: Twayne Publishers, 1979.
Wheeler, Elizabeth A. *Uncontained : Urban Fiction in Postwar America*. New Brunswick and London, Rutgers University Press, 2001.
大場正明『サバービアの憂鬱—アメリカン・ファミリーの光と影』，東京書籍，1993年。
亀井俊介『ピューリタンの末裔たち—アメリカ文化と性』，研究社，1987年。
川本三郎「サバービアの憂鬱」1992年。『フィールド・オブ・イノセンス』（河出文庫版，1993年）所収。
浜野成生「カードの家の憂鬱—チーヴァーのみた郊外族群像」，『今日のアメリカ作家群像』（研究社，1978年）所収。
間々田孝夫『消費社会論』，有斐閣，2000年。
三浦展『「家族」と「幸福」の戦後史—郊外の夢と現実』，講談社，1999年。
若島正「ジョン・チーヴァー　裸女と天使」，『乱視読者の英米短篇講義』（研究社，2003年）所収。